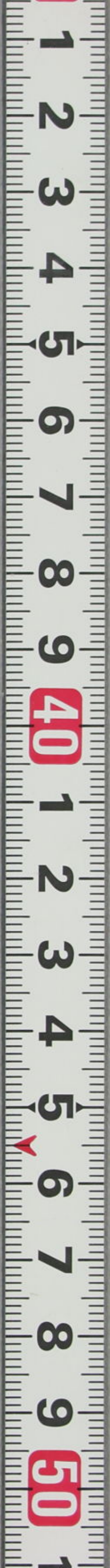


踊
形
花
之
巻
通

^ 13
3733
2



御水直撞編

泉流板

雲の鬘の

御水直撞編

かたせ海丸

御水直撞編



明へ13
號3733
巻2

踊形
花競

二編

甘泉堂



序の巻 蘭麝のあはれ 梅のうらみ 目利違ひぬ顔世に 三の巻 塵生

夢夜草の湯のさあても 熱き式島の短冊 三の巻上 夜雨小嵐の夜巻

まの柳がうらふ紅の烏帽子 三の巻下 握る手とまの油の浮く

袖合羽伽羅で作つゝ 推草よきと甘うらん 饅頭笠 四の巻 屈

風小描く米裏花散やとた身の九寸五分 五の巻 小判の買ひ

五十両入と賤布の骨かり 縞をれを見込ご 蛇目の破傘 六の巻

大蓋ふあゝ心切服の種が 嶋息杖ついで 女房が身賣の驕

七の巻 蜻の恥辱もまがう 洗ふ一カの 鯉口忠臣の心せうの 樓の舒鏡

七の巻



二編

豊國画

種清録



身へ進めても舞界の跡
門山の徒あはれさこそ
をを昨日今日推しつゝ
あま

寺岡平右衛門

△男の鼻のくろたは
七の松木小致光のま
もさ麻ねくよじま
蟬脚の

秀定丸

△市草文章筆のうら
さへ人目のあまのま
さのあしと響の夜金へ
あの花より残

大星の孫



△酒造の梅面輝ける
色浮くる三筋の青
をも只一筋のみ乱さね
復た小身と

千流流と那

△尾上のあつらゑの文
字音のあつらゑの
梅のあつらゑの
吹る風あまの

か加

△楊屋あつらゑの
お代もとあつらゑの
お梅もとあつらゑの
舞の目も

大星の孫





11
11
11



義経
宗清
宗換
宗芳
百寶

九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九
九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
一百

11
11
11

11

ありては[権左]かんせうふゆなせむすん一のあつ画師とねと

秀九右大夫兼石原数右衛門内田家の作院云[権左]の

昨年[権左]れすも希尾生れの九右大夫とあてらる事のあらういふて

かろまふれし[権左]もこのごう中[権左]成りて年次とに[権左]の作

多ゆ知[権左]さふらりていと[権左]あつらうな[権左]の作ら

[権左]それらのそりり早こはる[権左]あつてなるといふも

あつたやううが[権左]んせむすん一のあつ[権左]の作ら

のありやうお[権左]まふらりて[権左]の作ら

ま[権左]あつたやううが[権左]んせむすん一のあつ[権左]の作ら

入る流[権左]あつて[権左]の作ら

あつたやううが[権左]んせむすん一のあつ[権左]の作ら

△田原家の具あつた娘内九平坊[権左]あつたやううが[権左]んせむすん一のあつ[権左]の作ら

あらぬ娘の仕うち[権左]あつたやううが[権左]んせむすん一のあつ[権左]の作ら

も乳母あつたけのしやうらぬ[権左]あつたやううが[権左]んせむすん一のあつ[権左]の作ら

り[権左]あつたやううが[権左]んせむすん一のあつ[権左]の作ら

あつたやううが[権左]んせむすん一のあつ[権左]の作ら

△あつたやううが[権左]んせむすん一のあつ[権左]の作ら

あつたやううが[権左]んせむすん一のあつ[権左]の作ら

あつたやううが[権左]んせむすん一のあつ[権左]の作ら

あつたやううが[権左]んせむすん一のあつ[権左]の作ら

あつたやううが[権左]んせむすん一のあつ[権左]の作ら

あつたやううが[権左]んせむすん一のあつ[権左]の作ら

あつたやううが[権左]んせむすん一のあつ[権左]の作ら

△あつたやううが[権左]んせむすん一のあつ[権左]の作ら

本三 [本三] がぐあがえとらて板えがえせうであらう
△**利重**の事 **大里**の事 附 **利重**の事 **利重**の事
先服をさしつけられぬ物出さぬ画(え)もく
又大里が縁の事(き)もく一年(とし)たり
且(また)大里の事(き)もく一年(とし)たり
以上(かみ)よりいひつゝおのづから
の事(こと)もく一年(とし)たり
△**利重**の事 **大里**の事 **利重**の事
先服をさしつけられぬ物出さぬ画(え)もく
又大里が縁の事(き)もく一年(とし)たり
且(また)大里の事(き)もく一年(とし)たり
以上(かみ)よりいひつゝおのづから
の事(こと)もく一年(とし)たり

の事(こと)もく一年(とし)たり
△**利重**の事 **大里**の事 **利重**の事
先服をさしつけられぬ物出さぬ画(え)もく
又大里が縁の事(き)もく一年(とし)たり
且(また)大里の事(き)もく一年(とし)たり
以上(かみ)よりいひつゝおのづから
の事(こと)もく一年(とし)たり

利重の事

大里の事

あまやうひさすらふ藤よたてまりりある

板元正 別て四敷上せりも久然谷次第直実の画よりある

彼松小面のあつあつく敷を赤くしつて強うり
居もるもまの世社の男の上と膝をる色を塗か
れりりあき身の出家も同慈蓮生が騎約あつて
騎り下つて西の鬼もあれ東あつて背を
身外ひとと神とも佛ともい標その力繩親内根
然るも取取を只後よ返るも依を

忠臣花判早



踊秘容花巻競

一陽齋豊國画
柳水亭 種清依

初編十編三箇年出版

中俣の上



四名の物縁方々情の属るとふけ好美の品小ありこれ
林巻一たまを種場出此小着る花の言ひこれ入森のふこころさく彼
豊國大い画ける仙形も好くあつて一まのりど好幸ふうどを
世とこれ知款ふるるはは合巻のき給るはみ知れきとを容
登るあり非る音宮あり宛作る人物の踊りあつてさう如くその形
を後るる舞を捨あつめ種神とての場は交代毎出板をせぬ
後と約束めらや並は虎の程依る奉帝上り

板元 甘泉堂敬白



